

説教 『慰めを入れる器となる』山本 護 牧師  
聖書 詩編 94:17~19/コリントの信徒への手紙二 1:3~5

若い頃インドの町々を歩いていて、「バクシーシ／喜捨を」と手を差し出す物乞いにやたら遭った。バクシーシを得ると物乞いは礼も言わず、さも当然のような顔をしてふてぶてしい。帰路は経由地のタイで幾日か過ごした。朝、タイのお坊さん集団はタンブン(喜捨)集めにまわるが、民衆が身を屈めてタンブンすると、お坊さんは鷹揚に受け取っていた。喜捨の授受の作法もそれぞれでおもしろい。ただ前者は不可解で、後者は当たり前のように感じた。つまり、授者が優位で、受者が劣位である、と無意識に見ていた。お坊さんはタンブンよりも高価なブッタの功德を与えているから当然だ、と。たとえば日本の「お返し」などは、贈与によって生じる優劣段差を均そうとする慣習だろう。

「神は、あらゆる苦難に際してわたしたちを慰めてくださるので、わたしたちも神からいただくこの慰めによって、あらゆる苦難の中にある人々を慰めることができる(Ⅱコリント 1:4)」。ところが実際は、私たちは「とても苦しむ人を慰めるなんて出来ない」と腰が引ける。また苦しむ当人も「俺の嘆きが分るはずはない」と思っている(かも)。だから、声をかけることや援助することも慎重になる。

私たちは、贈与慣習をうまく使いながら相互の位置関係を微妙に保っている。そして大抵の場合、授ける強者より、受ける弱者の方が過敏に反応しがちだ。キリスト者同士は、こうした社会の段差を超えていく。何を足場に超えていくのか。苦難の時に分かち合う「慰めの出处」は神から(1:4)という足場。私たちは慰めをたっぷりと戴いている。私たちそのは戴いている「慰めの器」の役割を担う。「わたしたちも神からいただくこの慰めによって～人々を慰めることができる(1:4)」のである。

「そんな、おこがましくて」とか、「こんな自分が人を助けるなんて」とか。キリスト者にとってそういった謙遜はかえって傲慢だと思う。私たちが為す慰めや恵みは、私たちの所有ではないのだから。預けられた主人のタラントンを仕舞い込んでいた悪い僕(マタイ 25:24~26)が想像される。私たちは戴いている慰めや恵みを、自分の所だけに留めておいてはならない。恵みの所有者は私ではないのだから。

「キリストの苦しみが満ちあふれてわたしたちにも及んでいるのと同じように、わたしたちが受ける慰めもキリストによって満ちあふれている(Ⅱコリント 1:5)」。どうやら「苦しみ」と「慰め」は一つのものであるらしい。「苦しみを被るなら慰めはいらない」という功利は信仰ではない。「わたしたちは、いつもイエスの死を体にまとっている。イエスの命がこの体に現れるために(4:10)」。十字架の内に復活があるように、永遠の慰めを分かち合うキリスト者は十字架をも受け入れる(ロマ 6:6)。

「わたしの胸が思い煩いに占められたとき、あなたの慰めが、わたしの魂の楽しみとなりました(詩編 94:19)」。思い煩いこそ魂の楽しみを生じさせる扉。主の慰めを得るがゆえに。「主がわたしの助けとなってくださなければ、わたしの魂は沈黙の中に伏していただいでしょう(94:17)」。主の慰めがなければ、私たちは虚無に囚われたまま。主の助けがなければ、私たちは地中に隠されたタラントンのようなもの(マタイ 25:25)。「慰めの器」としての教会は、主から注がれている慰めを滞らせてはならない。



【おまけのひとこと】

主の慰めを入れる素焼きの器(Ⅱコリント 4:7) 元来もろく 長く使って欠けている 素焼きの器は葡萄酒を新鮮に保つ ただ蒸発しやすく 器への恵み分だけ目減りする しかし分かち合うには充分